

実技講座

- ①鑑賞することで表現が豊かになり、制作することで観る目が養われる。
- ②講師の作品に対する想いを聞き、様々な作品を鑑賞することで制作する楽しみを深める。
この2点をテーマに掲げ、今年度も実技講座が開催された。

■<彫刻>と<工芸>展関連普及事業

粘土塑像の実技講座

日 時＝平成16年9月11日・12日・18日・19日
10：15～16：15

講 師＝石上和弘(彫刻家)

場 所＝当館実技室・展示室

参加者数＝11名

ロダン館開館10周年を記念して本年の実技講座は彫刻を取り上げた。「ロダンに挑戦 ー大型彫刻を作ろう」をテーマに粘土塑像の技法による創作作品の制作とその展示を11人の参加者が体験した。

初日はロダン館で収蔵作品を鑑賞し、講師から彫刻の台座「地余」と表現の関係について説明を受ける。その後、実技室でどのような作品を制作するか、持ち寄ったイメージを基に話し合いを行った。最初は緊張気味だった参加者も、それぞれのイメージを発表し、実際に粘土を使ってマケットを作っていくうちに、いつしか笑顔になっていく。「粘土って楽しい！」思わず漏れた参加者の一言が、年齢に関係なく夢中になってしまう粘土の不思議な魅力を表していた。

共同制作の案が決定したところで1日目は終了。2日目は実際に制作に取りかかり心棒を組み立てる。週をはさんで3日目から粘土の荒付け、モデリングと作業が進み、2トン近い量の粘土がみるみるうちに使われていった。その中で、参加者全員が1つの目標に向け

て力を合わせ、世代を超えた交流を楽しむことができたのも、美術館で行う講座ならではの良さだったのではないかと担当者は感じている。

そして、最終日の午前中、波の中から人物などの群像が浮かび上がる共同制作作品「波涛」が完成した。それをロダン館、エントランスホールの順に移動させ一定の時間、展示したのは大きな収穫であったと考えている。ロダン館に置かれた自分たちの作品の背後に、「地獄の門」や「カレーの市民」を見た参加者たちの目には、ロダン作品の素晴らしさが一層強く感じられ、鑑賞の視点も変わったであろう。

鑑賞し、制作を体験した後、また鑑賞する。その循環の中で、感性の深まりが確かな手応えとして感じられる、充実した内容の実技講座であった。



<粘土塑像の実技講座> 完成作品と参加者